

# 私の一冊

社会福祉学科 江原 勝幸 先生

野田知祐 著 『日本の川を旅する:カヌー単独行』

小鹿図書館 291.09 || N 92

大学4年の夏、本来は就活や卒論で忙しい(はず)の中、九州をバイクで旅していた。目的は百名山の山登りで、旅のスタイルは野宿。その山旅で最も行きたかった屋久島の宮之浦岳を登頂後、宮崎霧島連山を経て熊本へ。たまにはまともな食事と思い、菊地川沿いの山小屋風のカフェでランチ。山や旅の話などの流れから2件目の山小屋づくりを手伝うことに。作業後、オーナー奥様の手料理の夕食を頂いていたところ、がっちりとした体格の中年男がふらりと自分の家のように入ってきて、ドスンとテーブルの上に魚籠置いた。どうやらオーナーとこの男は友達で、川で獲れた魚をもってきたよう。その男は会話をほとんどせず、魚を残すとすぐに出て行ってしまった。ただその際、オーナーが手短かにバイク山旅の若者のことを紹介し、その男は若者の肩をその大きく厚い掌で力強く叩き、「川もいいぞ！」と一言残して去っていった。その無骨な男こそ、野田知祐だったことを後で知った。

本書は1981年、野田さんが43歳の時に、月刊誌『旅』も連載した川旅のエッセイ。その後はカナダのマッケンジー川やユーコン川など大河から日本の小川まで様々なカヌー旅をまとめ30以上の著書を残している。カヌーイスト、作家、川遊びのプロなど様々な肩書を持った野田さんの最初の出版書籍であり、その連載記事をまとめた本書は日本ノンフィクション賞新人賞を受賞した。

北海道の釧路川から九州の川内川まで、清流の四万十川だけでなく下水化した多摩川など14の代表的な日本の川をカヌー(正式には折り畳んで持ち運べるカヤック)で下った川紀行である。激流を巧みに下る競技カヌーの技術的なものではなく、魚を獲り川で遊び、酒を飲みテントに泊まり、時にはダムや堰を迂回し風呂をもらい、流れに身を任せて数日間の川旅で出会う人々(老人)との会話やその生活が軽やかにかつ切れやかに語られていて引き込まれる。重要な交通・物流手段であった川がその役割をほぼ終え、高度経済成長後の80年代日本においてかつての清流が汚れ、大量に獲れた魚が清流に住むイワナやアユから汚泥でも生きられるヘラブナやコイに代わる中、自然保護を上段に構えて語るのではなく、水面から見える風

景や川べりで暮らす人々と交わす会話から川にまつわる人々の暮らしの変わりようを肩肘張らずに警鐘を鳴らし憂っている。本書を読むと、大気汚染・地球温暖化やマイクロプラスチック問題など現代で壊滅的な自然破壊が続いている中、約40年前の美しいはずの日本の川も瀕死の状態であったことがよくわかる。そして、生活や遊びの糧であった川が、危険で近づいてはいけな川へと人々が目を遠ざけていく過程で、人々の暮らしも地域特有の伝統的な漁法も当時から瀕死の状態であったこともわかる。本書を手にとって、すっかり忘れ去られてしまったよき日本の営みや文化を感じ取って欲しい。

大学4年夏の熊本での野田さんの「川もいいぞ！」からその後一度もお会いすることはなかったが、数々の著書やエッセイで楽しませて頂いた。今年3月末、享年84歳で生涯を閉じられたという訃報が届いた。心からご冥福をお祈りいたします。